

【全国IBMユーザー研究会連合会の活動状況】

「手作り」オープン」をキーワードに改革を推進。

IBMユーザー研究会(以下、ユーザー研究会)は、会員数2,600社を擁するIBMの製品ユーザー団体の一つであり、全国16地区でそれぞれ独自の活動を展開しています。各地区のIBMユーザー研究会は、例会やセミナー、研究会などを通じて、IT(Information Technology: 情報技術)スキルやITの有効利用についての研究・発表を行うと同時に、具体的な適用事例などの情報交換を通じて知識と経験の向上、会員相互の親睦を図っています。ユーザー研究会の会員は、全国IBMユーザー研究会連合会(以下、全国研)の会員として自動的に登録され、全国規模の大会であるIBMユーザー・シンポジウムやiSUC(Intermediate System Users Conference)に参加でき、全国各地の会員と相互に交流を図ることができます。変化の激しいITやビジネスにまつわる情報を的確かつスピーディーに入手できるばかりでなく、さまざまな業種・業態の会員との交流からビジネスのアイデアやヒントを得ることができるのです。全国研の2003年度(2003年6月~2004年5月)の活動について、会長 内藤 信行氏(JFEスチール株式会社 IT総括部長・理事)に語っていただきました。聞き手は本誌編集長 斉藤 功です。



全国IBMユーザー研究会連合会 会長
内藤 信行氏(JFEスチール株式会社 IT総括部長・理事)

関東IBMユーザー研究会における改革
まず、内藤さんのユーザー研究会におけるキャリアをご紹介しますか。
内藤氏 当社(JFEスチール株式会社。以下、JFEスチール)は、2003年4月に日本鋼管株式会社(以下、NKK)と川崎製鉄株式会社が経営統合して生まれた新しい会社です。私がユーザー研究会と主体的にかかわるようになったのは、NKKの情報システム部長時代に関東IBMユーザー研究会(以下、関東研)の委員をお引き受けしてからです。委員時代は、どちらかというと不良委員でしたので(笑)呼ばれたときに顔を出した程度でした。2001年度に関東研会長をお引き受けすることになり、心を入れ替えたというわけではありませんが、せっかくお引き受けしたので、委員の方たちとも話し合い、少しでもいい方向に進めるように幾つかの提案をしました。その後、2002年度は全国研の副会長をお引き受けし、2003年度に会長に就任しました。

関東研では組織改革に取り組まれたのですか?

内藤氏 “改革”というほど大きな取り組みのつもりはなかったのですが、やはりITベンダー主体の活動では会員にとっての面白みがないだろうということで、少しでも会員主体の運営に変えていきたいと考えたわけです。

具体的に、どんな改革に取り組まれたのですか?

内藤氏 先程「不良委員」だったと言いましたが、これは仕方のない面もありました。新しく委員になってもこれまでの経緯や勝手が分からないのでどうしても受動的にならざるを得ません。そこで、新任委員にも即戦力として活躍してもらえるように、関東研の歴史や意義、活動内容を徹底的に勉強していただきました。新任委

員であっても会長・副会長や事務局に言われてから動くのではなく、自ら積極的に行動してもらえるようにするためです。その結果、各委員に自主的に企画を立ててもらえるようになり、例えばセミナーでも定員がオーバーするといった状況が続いています。新任委員を含め各委員が、会員と同じ目線で企画を立てることで、魅力的なテーマやタイムリーなテーマが増えてきたということでしょう。

全国研における改革の取り組み

全国研の会長に就任されてからは、そうした関東研での改革を踏まえて展開していったということですね?

内藤氏 実は、一昨年のことなのですが、前会長の國井 匡裕氏(東北インフォメーション・システムズ株式会社 代表取締役社長)から、会長就任の打診がありました。しかし当時は、当社の経営統合準備の真っ最中でして、統合後の私のポジションさえ明確ではない状況でした。そこで経営統合後に会長職をお引き受けするということで、取りあえず副会長として会長をサポートさせていただくことになりました。会長の留任は、全国研としては例外的なことなんです。國井氏に会長職にとどまっていたいたのです。

そのころ國井氏が「会員数を増やすにはどうすればいいか」という問題提起をされまして、全国研の各委員を仙台に呼び集めたことがありました。一泊して徹底的に議論したのですが、それが発端となって改革活動が進んでいったのです。

まずは、全国研の中に拡大常任理事会というものを作りました。当時、常任理事は会長・副会長・顧問の3者で構成されていましたが、ユーザー研究会として本質的な改革議論を進めるには、専門委員会の委員長やiSUC、ユーザー・シンポジ

ウムの実行委員長を加えるべきであろうということになりました。それを最終的に拡大常任理事会答申にまとめたのです。この答申を、全国研の理事会で発表して承認を受け、拡大常任理事会を中心に改革を進めていくことになりました。



「会員を増やすには」ということでスタートした改革への取り組みでしたが、議論を重ねる中で、むしろ休眠会員の活性化や、会員への価値の提供にこだわるべきという意見もあり、こうした議論の中で、関東研の取り組みもクローズアップされ、全国研にも展開することになりました。

2003年度における改革の実際

それでは2003年度における改革の実際といいますが、活動内容や体制の変化をお話いただけますか。

内藤氏 拡大常任理事会で議論した結果、ユーザー研究会を活性化するには、会員一人ひとりの価値向上と満足度を向上させることが大切であり、その推進役となるのは地区研で、全国研は各地区研に対して共通サービスを提供するという大枠が再確認されました。この方針を実現するために「手作り」「オープン」という二つのキーワードを掲げ、改革に取り組むこととしました。会員の方々に「会員になって良かった」と思っていたような手作りのプログラムを考え、iSUCのように運営もできるだけ手作りで進めていくと同時に、会員間あるいは日本アイ・ピー・エムとの間でオープンなディスカッションを行い、問題を共有し、解決を図っていくということです。

より具体的には、今まであいまいだった理事会や委員のポジションや、運用のルールを明確化していくという方向で動いています。会長と副会長2名が全体のマネジメントを担当し、各専門委員会の委員長にはそれぞれの分野で最大の成果を挙げてもらうということです。近ごろは、日本アイ・ピー・エムをはじめとする多く

の企業で、取締役と執行役員を明確に分けるという動きが顕著になっていますが、全国研もそれにならった組織となりました。また、日本アイ・ピー・エムとの連携をより密にするために、事務局に全国研専任の担当者置き、会長・副会長のマネジメント・チームに参加してもらうことで課題の共有化を図り、それこそ“四位一体”の体制で問題を解決していくことになりました。

改革の成果は、着々と

そうした新体制、あるいは改革による具体的な成果は、既に挙がっているのでしょうか？

内藤氏 はい、いろいろありますよ。例えば、ユーザー・シンポジウムというiSUCと並ぶ大切なイベントが年1回あります。これは各地区研が持ち回りで主催しているのですが、各会員企業から募集した論文の発表がイベントの中心であり、従来、最優秀論文の発表はオープニング・セレモニーの中で行われていました(本誌38号115ページ参照)。その第42回大会が2004年5月に広島で開催されるのですが、実行委員会からは、最優秀論文の発表はオープニング・セレモニーの場ではなく、ほかの論文発表と同じように論文発表セッションで行いたいという意見が出されました。理由は、最優秀論文といえども、参加者全会員が興味を持つ内容とは限らないからです。一方、論文委員会としては、やはり最優秀論文なのだから大会の参加者全員に紹介したいという意向があります。そこでマネジメント・チームが論文委員会の意見を預かり、広島まで飛んで行って実行委員会とフェイス・ツー・フェイスで話し合いました。最終的に、オープニング・セレモニーでは全体の流れを壊さない形で最優秀論文を紹介し、発表そのものは論文発表セッションで行うということで決着しました。慣習だからということでそのまま従うのではな

く、お互いに意見を出し合うことで、その意味を再確認できたということです。

改革活動が根付いてきたことを示すエピソードだといえますね。

内藤氏 ほかに幾つかの成果が挙がっています。例えば研究活動の一つにIT研究会があります。これは各地区研で、実務に直結したテーマや、先進的なテーマを設定して参加者を募り、約1年間の研究活動を通じて会員の自己啓発・人材育成・親睦を図ろうというものです。ところが、活動費用や会員数、地域固有の問題などで、2002年度には開催できない地区研が九つもありました。講師・アドバイザーは日本アイ・ピー・エムから派遣してもらうのですが、毎月1回出張してもらおうにもコストの点で実施が難しかったのです。しかし、IT研究会の活動はユーザー研究会の主要活動の一つですから、2003年度は全国研の予算から賛助金を交付して16地区すべてで開催することができました。各地区研の地域格差の解消についても、全国研でできる限り支援していければと考えています。

先程もありましたように、地区研あつての全国研ということですね。

内藤氏 その通りです。各地区研が同じレベルのサービスを受けられるように、サポートしていくのが全国研の役割です。例えば、ある地区研が開催するセミナーがあれば、Lotus Sametime®を使ってほかの地区研にも流すといった取り組みなど、いわゆるコンテンツの共有やコラボレーションの推進についても、残り半年の任期の間でできる限り進めたいと思っています。

INFORMATION

【第42回IBMユーザー・シンポジウム概要】

- 大会テーマ
「オンデマンド"e"未来」
～ 広島じゃけんe-出合い～ 話・和・輪
- 開催期間
2004年5月20日(木)～21日(金)
- 開催場所
リーガロイヤルホテル広島(広島市)